



アルキメデス

飯田市美術博物館自然部門
地域史研究事業ニュースレター

HEUREKA! Vol.2 INADANI

ユリーカ! イナダニ

発行日 2006年6月1日

発行 飯田市美術博物館 〒395-0034 長野県飯田市追手町2-655

TEL 0265-22-8118 FAX 0265-22-5252 E-mail hiruma@iida-museum.org



私がおもう地域史研究事業(自然)の意義

飯田市美術博物館 蛭間 啓

伊那谷は標高3000m級の中央・南アルプスにはさまれ、中央部には天竜川が流れています。さらに、本州の地質構造を大きく二つに分ける中央構造線が近くを通っており、日本で最も自然情報に富んだ地域の一つです。

学術・文化的視点から

本地域の多様な自然情報を掘り起こすことは、伊那谷周辺の学術・文化のみならず、日本、さらには世界の自然科学の発展にも貢献するものになるでしょう。伊那谷自然友の会が掲げる伊那谷まるごと博物館のコンセプトのもと、自然情報を蓄積・公開して行けば、本地域は広くほかの地域の人々の好奇心をもくすぐるものとなるでしょう。

地育力(教育・普及)の視点から

飯田市では、地育力を高め、伊那谷で育ち、一度は離れても再び伊那谷に帰ってきて活躍する人材を育成することを目標としております。本研究事業は、市民や研究者とともに、地域の宝を見つけ出し、それらを共有してゆこうとするものです。この過程において、美博学芸職員と若手研究者・市民との密なネットワークが形成され、組織的な人材の育成・発掘につながって行きます。

地域行政の視点から

地域行政の自治的・経済的独立が課題となった現在、この豊富な自然情報を掘り起こすことは、当地域の持続的発展の礎になります。すぐに何かの役に立ち、地域に利益をもたらすという性格のものではありませんが、一つには、失敗や無駄をださないための重要な知識の蓄積であるといえます。たとえば、なんらかの施設（例えば公園・養護施設・廃棄物処理施設など）の建設計画をたてる時に、地域の自然情報がすでに蓄積されていれば、その情報をもとに施設建設の適地・不適地のわりだしを行うことができます。つまり、計画の失敗・税金の無駄使いを回避することに役立ちます。

以上、学術・教育・地域行政の視点から本事業の意義についておもう所を述べさせていただきましたが、本事業に秘められた可能性は無限大で、説明しきれぬものではありません。地域の皆様一人一人が、独自に本事業の価値を見出していただければうれしく思います。

最後に、地域を人の体に例えるならば、本事業を創造性豊かで元気な人間に育つための、成長期の様々な経験、あるいは日々の健康を支えるビタミンやカルシウムのようなものにしてゆきたいと思っております。皆様のご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成18年度研究協力者、研究テーマ一覧

本年度は、水文、地質・地形、植物、動物の4分野にわたり、昨年度をさらに3名上回る以下18名の研究協力を得て事業を進めることになりました。

水文（1名）

川上陽一 「中央アルプス濃ヶ池の縮小化の原因と過程」

地質・地形（6名）

明石浩司 「赤石山脈戸台川における谷底面の横断面構造と堆積物・その1」

木下房男 「万古溪谷に見られる球状花崗岩について - 鉱物の化学分析値から言えること - 」

久保田賀津男 「喬木村における塩基性岩脈の調査」

坂本正夫 「古根羽火山群の火山活動復元の研究」

下平真樹 「中央アルプス千畳敷カール・極楽平カールに発生した土石流の研究」

手塚恒人 「中部地方領家帯、伊那山脈西麓 - 天竜峡付近の加々須累帯火成岩体の地史

- 加々須累帯火成岩体をつくった3種類のマグマと生田花崗岩質マグマの役割 - 」

植物（5名）

北沢あさ子・はなのき友の会 「長野県南部の主にハナノキの生育する湿地に集中する、絶滅のおそれのある植物の現状報告」

佐伯いく代・はなのき友の会 「絶滅危惧植物ハナノキの萌芽特性」

藤田淳一・大窪久美子 「ホソバナライシダ *Arachnioides brealis* と

ナンゴクナライシダ *Arachnioides miqueliana* の分布状況について」

北城節雄 「中山間地における農耕地の植生調査 - 伊那谷から失われていく在来植物を中心に - 」

百瀬 剛 「伊那谷におけるヤドリギ科植物の水平分布について」

動物（6名）

大原 均 「伊那谷におけるカワムツ *Zacco temmincki* の分布を中心とした生物地理学的研究 - 上伊那における分布 - 」

桐生尊義 「セキレイ類は減少しているのか？」

古田 治 「大鹿村周辺の双翅目相についての研究その1（ニクバ工科イェバ工科ヒメイェバ工科）」

美馬純一 「伊那谷におけるヨシノボリ属の生息状況について」

柳生将之 「長野県天竜川における準絶滅危惧種カジカの分布現況」

鷲田俊一 「豊丘村天竜川の野鳥の月別変化」、「下伊那におけるカワウの移動について」

ピックアップ HEUREKA!

下伊那におけるハナノキ分布の謎を探る

東京農工大学農学部 佐伯 いく代 (平成17,18年度研究協力者)

突然ですが、みなさんは今、どちらにお住まいですか？ 私はわけあって新潟県に住んでいます。この「HEUREKA! INADANI」を読まれているのであれば、伊那谷在住の方がほとんどでしょうか。どちらにせよ、そこに住んでいらっしゃるにはそれなりの理由があるかと思えます。例えば、ご両親がもともと伊那谷に住んでいたとか、お仕事やご結婚で移られたとか。また、ずっと同じ場所に住んでいる方もいれば、ある時期に移られたという方もいることでしょう。

私たちにとって、いつからどうしてそこに住んでいるのかというのは、比較的簡単に答えられる質問です。しかし、動物や植物となると、そうもいきません。どうしてここに、こんな生き物がいるんだろう？ それはいつからなんだろう？ 動植物の分布の変遷や要因をつきとめることは、タイムマシンでもない限り、非常に難しい作業です。

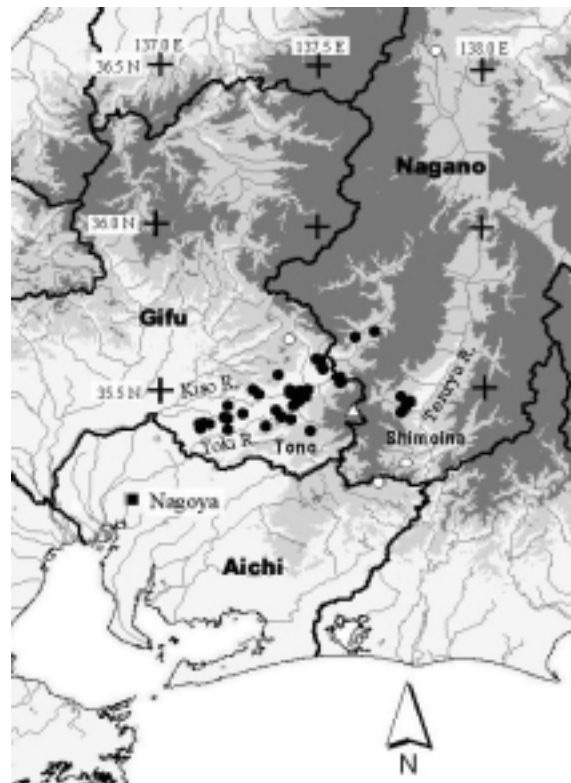
私は、ハナノキというカエデの仲間について研究をしています。この木は、伊那谷をはじめとする中部地方のごく限られた地域にのみ分布しています(地図参照)。あまりに分布域がせまいので、1910年頃までは自生地がわからず、ミステリアスな植物だったようです。ハナノキは、起源の古い植物で、祖先種の化石は北半球の広い地域から見つかっています。それによると、数百万～数千万年前には、日本だけでなく、ヨーロッパ、アラスカ、北アメリカにも分布していました。一体いつ頃から今のような分布になったのか、定かではありません。しかし、ハナノキが湿地に生育することから、湿地の有無が、分布に大きな影響を与えたのではないかと考えられています。

ハナノキの生育地が集中する地域に、岐阜県の東濃地方があります。この地方では、土岐砂礫層という独特の地層が広がっています。砂礫層といっても、水を通しにくい層を含むため、砂礫層の分布域では、湿地がいたるところにできています。東濃地方でも化石の記録があるので、ハナノキはこの湿地を渡り歩くことにより、長い期間、東濃地方に分布し続けることができたと推測されています。実際、ハナノキと土岐砂礫層の分布は重なることが多いのです。他の地域では、こんなに湿地が形成され続けることはなかったけれども、東濃地方では例外だった。だからハナノキが生き延びてこられた、というわけです。

では伊那谷ではどうでしょうか？ ここでも湿地が長い間、形成され続けてきたのでしょうか？ その答えはまだよくわかっていません。ただ、天竜川周辺にも、土岐砂礫層に似た地層が堆積しています。東濃地方と同様に、下伊那地方でも数百万年もの長い間、湿



ハナノキの巨木



ハナノキの分布

● 自生地 ● 植栽の可能性のある生育地
○ 恵那山

地が高密度で存在していた - ハナノキはそれを裏づける植物なのかもしれません。

この仮説を確かめるためにはもう少し調査が必要です。まず、ハナノキが今、伊那谷のどこに生育しているのかが正確に把握しなければなりません。これまでの研究では、飯田市と阿智村の天竜川右岸から生育地が報告されていますが、その他の地域でもひっそりと生育しているかもしれません。化石や地質の調査も不可欠です。東濃地方では、約1000万年前の地層からハナノキの祖先種の化石が見つかっています。しかし、伊那谷からは、化石の報告がありません。また、伊那谷に分布する地層に湿地を形成しやすいものが含まれているかどうか確認しなければなりません。(ご専門の方(そうでなくてもいいのですが)、何か情報がありましたらご連絡ください☆。)

湿地の分布だけでなく、気候や、他の植物との競争によって分布が制限されている可能性も考えられます。ハナノキがどうして伊那谷に分布しているのか。この謎は単純だけれども、地質や化石の情報も含めた総合的なものの見方が必要です。

一つ残念なことは、近年、ハナノキの数が減少していることです。開発などにより生育地となる湿地が少なくなっているからです。生育地の消失は、さきに書いたような自然の歴史を調べる手がかりを失うことに繋がります。伊那谷の自然を特徴づける木として、いつまでも生育し続けてほしいですね。

参考文献

植田邦彦, 1994, 東海丘陵要素の起源と進化.

岡田博・植田邦彦・角野康郎編「植物の自然史」, 3-18, 北海道大学図書刊行会.

お知らせ

地域史研究事業成果ガイドブック

「遠山川の埋没林 - 古代の地変を未来の警鐘に - 」が発刊されました

遠山川沿いに現れた埋没林を紹介するガイドブックで、旧南信濃村教育委員会が企画し、合併後は飯田市美術博物館が引き継いで発行したものです。埋没林の分布から、埋没林ができた1300年前の遠山の森の様子や地震・くずれ・遠山川せき止めといった一連の地変が紹介されています。著者の一人、寺岡義治さんの長年の調査・研究が実ったものです。

飯田市美術博物館の他、遠山郷土館やまつり伝承館「天伯」でも購入できます(頒価1000円)。

問合せ: 飯田市美術博物館(0265-22-8118)

美博 新飯田市誕生記念企画展 「遠山大地変と埋没林」 が開催されます

期間: 7月22日(土)~9月24日(日)

展示では、埋没林がもつ不思議な世界を紹介するとともに、遠山を襲った地震とそれに伴う山くずれおよび天然ダム形成という一連の“遠山大地変”を科学的に解説し、山国の大地の営みを考えます。

開館時間: 午前9時半~午後5時(入館は4時半まで), 休館日: 毎週月曜日(祝日の翌日), 8/22
観覧料: 一般310円(210円), 高校生200円(150円), 小中学生100円(80円)(内は団体)

展示解説会(いずれも午前10時~11時、午後2時~3時)

期日: 7/30(日), 8/6(日), 8/13(日), 8/27(日), 9/3(日)

記念講演会『埋没木が明らかにした古代の自然災害』

日時: 7/23(日) 午後1時30分~4時30分

講演1: 遠山地震と埋没林 寺岡義治先生(伊那谷自然友の会) 午後1:30-2:30

講演2: 年輪年代学と古代の歴史・災害(仮) 光谷拓実先生(奈良文化財研究所) 午後2:40-4:10

講演会 「身近な生き物や環境を守る - 保全生態学の視点から - (仮題)」

講師: 鷲谷いづみさん(東京大学大学院教授)

鷲谷先生は、保全生態学入門などの著作で知られ、植物の生活、植物と昆虫の関係、生物多様性保全などの研究に活発に取り組んでおられます。お話しの聞ける貴重な機会ですので、是非足をおはさびください。

日程: 6月24日(土) 午後2時~3時30分, 会場: 飯田市美術博物館 2F 講堂(入場無料)

共催: 伊那谷自然友の会